

イタリアにおける国語学(1873-1968)

菅田茂昭

“イタリアにおける国語学”と題して、イタリアの言語学者・国語学者たちにとって自国語がこれまでどのような研究対象とされたかを概観したい。

イタリアはイタリア語の父(*padre della lingua italiana*)と称せられる Dante(1265-1321)の“俗語論”(De vulgari eloquentia)以来、ラテン語にたいするイタリア語の問題、つぎに多くの方言地域に分かれたイタリアでは言語統一の問題など重要な国語問題をかまえていた。すでに1582年クルスカ学会(*Accademia della Crusca*)が設立され、こんにちに至るまで国語辞典の編さんをおもな仕事としてイタリア語の最高権威となっている。

しかしながら印欧語の比較文法が生まれ、科学としての言語学の方法論が確立された以後の研究をもって言語学的な研究と呼ぶことにすれば、G. I. Ascoli(1829-1907)とともにイタリアの言語学がはじまるといえることができる。ユダヤ人であった彼は最初セミト語の研究に従事したが、のちミラノで“古典語・ネオラテン語の歴史的比較”の講義をした。しかし彼の国語学への貢献は、ちょうど K. Brugmann(1849-1919), A. Leskien(1840-1916)などの少壮文法学派の活躍していたころの1873年に *Archivio glottologico italiano* を創刊したことにある。いまやイタリアにおける最も古い言語学誌となったが、彼はこの創刊号をレトロマン語特集号とし、以後のイタリアの諸方言研究の基礎を築いた。また現在でも大学の言語学科(*Istituto di glottologia*)などにみられる *glottologia* なる名称の名付け親でもある。¹⁾ 彼につづく学者としては C. Salvioni(1853-1920), C. Merlo(1879-1960)の名を挙げるにとどめる。

さて筆者は、Ascoli から現在までのイタリアの国語学を概観するにあたって、この時期を B. Migliorini(n. 1896)の国語学誌 *Lingua Nostra* が創刊された1939年、つまり便宜上1940年を境として前後二つの部分に分けて考えることを提案したい。そしてこゝでは主として1940年以後を対象としたい。たゞしそのまえに1940年以前に属する学者として二人の著名なロマンス語学者 M. Bartoli と G. Bertoni についてはふれておく必要がある。

M. Bartoli(1873-1946) はスイス人学者 G. Gilliéron(1854-1926)の弟子で、トリノ大学教授。ちょうど B. Croce(1866-1952) と K. Vossler(1872-1949)の美学や理想主義哲学の影響をうけた彼は、これらの思想を言語地理学と結合して新しい科学をつくり、かつての新文法学(少壮文法学派の)にたいして新言語学(*neolinguistica*)と名付けた。彼は1925年“*Introduzione alla neolinguistica(Principi-scopi-metodi)*”において、Gilliéron

注 1) Ascoli の言語学用語は E. de Felice: “La terminologia linguistica di G. I. Ascoli e della sua scuola” (Utrecht, 1954)

の言語地理学をもとにかつての音韻法則に対抗すべく、これを空間と時間との関連においていくつかの規範にまとめた。そのうちのいくつかを紹介すると、……孤立地域 (l'area più isolata) の規範=古形は孤立した方の地域に保存される。

傍側形 (fase laterale) の規範=二つの形のうち、その一つが傍側地域に、他が中央地域に見出されるときは、傍側地域の形が原則として古形である。

大地域 (l'area maggiore) の規範=大地域は原則として古形を保存する……などである。²⁾

なお Bartoli の学説をめぐって、これを批判する R.A. Hall Jr. (n. 1911) と G. Bonfante (n. 1904) との論争は C. Tagliavini (n. 1903) もその“言語学史” (Panorama di storia della linguistica) でとりあげている。

Bartoli が U. Pellis (1882-1943), G. Vidossi (n. 1878) とともに計画した“イタリア方言地図” (L'Atlante linguistico italiano) は協力者 Pellis およびつづく Bartoli 自身の死によって、改めて B. Terracini に受継がれているが、これが完成されれば K. Jaberg (1877-1958) と J. Jud (1882-1952) の“Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz” を量的にはるかに上回ることが予想される。

つぎに Bertoni (1878-1942) も Bartoli と同時代の学者であり、おなじく Croce と Vossler の理想主義の影響をうけた。しかし彼はそれを文献学に融合した。出身地 Modena の方言、またとくに XIII 世紀の文学の研究でも知られているが、彼の理想主義はその著“Programma di filologia romanza come scienza idealistica” (1922) のなかに容易にうかがえる。そこでは言語の創造活動 (l'atto creativo linguistico) が強調され、言語 (lingua) は資料にすぎず、これに精神が加わって話し手の口に出るときはじめて生きたことば (linguaggio) となるとした。話し終ったことばは精神を離れ、もはやことばではなくことばに先行する資料にすぎない。わが国の時枝言語過程説を想起させる内容である。彼は晩年ローマ大学でロマンス語学科の機関誌 *Cultura neolatina* を創刊している。

ところで理想主義に鼓舞された二人の学者 Bartoli と Bertoni が相ついで亡くなる 1940 年過ぎは、イタリアの国語学が新しい時代を迎える時期となった。ちょうど Bartoli の没年にあたる 1946 年、G. Nencioni (n. 1911) は“Idealismo e realismo nella scienza del linguaggio” において言語学における理想主義を批判し、同時に新しい国語学者 B. Migliorini と言語学者 G. Devoto (n. 1897) は力をあわせて LN 誌の創刊にあたった。政治的にもファシズムが崩壊し、共和政体の生まれるときであった。これらは Ascoli 以後現在までの国語学の歴史を二分するに足る事件と考えることができる。

さて、1939 年の LN 誌の創刊はいよいよ今日までの国語学の歴史を回顧して気付くことは、ほぼ 10 年ごとがそれぞれの特徴をもって位置づけられることであろう。

最初の約 10 年間 (1939-1950) は、イタリア語研究の促進時代といえることができる。

注 2) 小林英夫：「言語研究——問題篇」のなかに“バルトリ、新言語学派と新文法学派、1936”として紹介されている。

LN誌はイタリア語への関心を高め、イタリア語研究を推進することを目標としたものだが、“光栄ある伝統の尊重”と“新しき時代の要求に応ずる”ことの二つの研究態度をかかげ、diachroniqueとsynchroniqueな方法の確立されつつあることをほのめかしている。

Migliorini の XX世紀のイタリア語にかんする主要な研究書が世に出たのもこの時代である。時代の要求に応じて造られていく新語の分野では、伝統的な接頭辞にたいして radio-, auto-, super- などに prefissoide という新しい用語があてられた。しかも新語にたいしては glottotecnica なる方法で規範の決定を成りゆきにかかせることなく、イタリア語の伝統のわくにかない、かつ時代の要求にも応じうるものを残してゆく立場をとり、このため純正主義(purismo)にたいして Migliorini の方法は新純正主義(neopurismo)と呼ばれている。

つぎの 10年間(1951-1960)は語原・語史の集大成の時代と呼ぶことができる。

まず 1950年から 1957年にかけて Alessio-Battisti: “Dizionario etimologico italiano” 全5巻が刊行されるが、この間に A. Prati: “Vocabolario etimologico italiano” (1951), D. Olivieri: “Dizionario etimologico italiano” (1953), B. Migliorini-A. Duro: “Prontuario etimologico della lingua italiana” (1954) などが続刊されていることが注目される。なおこれらの辞典に先がけて Migliorini と Devoto の辞典論、それぞれ “Che cos'è un vocabolario?” (1946), “Dizionari di ieri e di domani” (1946) が存在したこと、また前時代を通じてやはり語原にかんする論文が圧倒的な点数⁴⁾を占めていたことも相づく語原辞典の刊行と無関係とはいえない。

さらに二つの重要なイタリア語史の出版がこの時代に属する。Devoto の “Profilo di storia linguistica italiana” (1953) は同著者の “I fondamenti della storia linguistica” (1951) をイタリア語に応用したもので、いわゆるイタリア史でもなければイタリア語の歴史文法でもなく、制度としての言語を通じてみたイタリアの文化史ともいふべきものである。そして 1950年代は Migliorini の “Storia della lingua italiana” (1960) の完成をもって終わることになるが、このイタリア語史は帝政期の Augustus から 1915年まで⁵⁾を時代別に扱って 800余ページにおよび、まさにこれまでながい間イタリアが望んでいたもので、Brunot や Menéndez Pidal の語史にようやく匹敵する存在となった。

現代語への新しい関心も O.F. Martini: La lingua e la radio ”

注 3) 小林英夫: 「言語研究 — 現代の問題」のなかで “ペルトーニ、音韻法則, 1942” がある。

4) “The year's work in Modern Language Studies” のなかの Italian Studies—language (by Migliorini) により計算した。

5) のちに I. Baldelli との共著 “Breve storia della lingua italiana” において “1916～現在” が Baldelli により追加された。

(1951), C. Battisti: "La lingua e il cinema" (LN, 1952), A. Menarini: "Il Cinema nella lingua, la lingua nel cinema - saggio di filmologia italiana" (1956) などにかがえる。

なお1960年はカプア文書(960)にはじまるイタリア語の歴史千年祭にあたった。こうして国語史が完成されたあと、つづく1960年代にはいと現代語への関心はさらに高まっていった。1961年以後を一応構造主義の時代としたい。規範的な文法書はさておき、ようやくイタリアにも構造主義言語学の影響が現われるにいたった。ここでは現在のイタリアの構造主義言語学を代表する若い3人の学者を挙げることにする。

まず T. de Mauro (1956 ローマ大学卒) は "Storia linguistica dell' Italia unita" (1963) において1861年のイタリア統一以後のイタリア語の変化を社会的、政治的背景との関連において論じ、都市化の進行につれて方言がすたれていく過程などを分析した。しかし彼の構造主義への関心は Saussure: "Cours de linguistique générale" のイタリア語訳の完成(1967)にみられる。(なおこのほん訳には Saussure にかんする詳細な *Notizie biografiche e critiche* がそえられている)。

つぎに G. C. Lepschy (n. 1935) はイタリア語方言の phonemic な分析にアメリカの構造主義言語学をとりいれ、"Trasformazione e semantica" (1966) などの論文では N. Chomsky の変形文法の イタリアへの有力な紹介者となった。なお "La linguistica strutturale" (1966) では Saussure 以後の構造主義言語学の歴史を学派ごとにとどっている。

さいごに L. Rosiello (n. 1930) は "Struttura, uso e funzioni della lingua" (1965) の後半で Montale の詩の構造主義的分析を試みていることが注目される。

これらの若い構造主義者たちの後援者は、ポーロニヤ大学の言語学科主任教授 L. Heilmann といえる。論文 "Strutturalismo e linguistica" (1963) において、ブラハ学派を高く評価し、1966年には *Lingua e stile* 誌を創刊してイタリアにおける構造主義言語学の土台を築きつつある。

さらに1961年くらい今日まで Saussure のイタリア語訳はもとより、C. Bally の "Linguistique générale et linguistique française" を C. Segre がほん訳(1963)、A. Martinet の "Elements de linguistique générale" を Lepschy がほん訳(1967) するなど、外国の言語理論書への関心がとくにめだっている。変形文法も N. Costabile: "Le strutture della lingua italiana - grammatica generativo - trasformativa" (1967) によりイタリア語への応用が試みられている。⁶⁾ ついでに G. Rohlfs の "Historische Grammatik der italienischen Sprache und ihrer Mundarten" のイタリア語版が1966年くらい刊行されはじめたことも記しておきたい。

注 6) イタリア語変形文法の入門書にすぎず、たとえば使役・知覚動詞を含む構文などへの応用は充分とはいえない。

以上結論として、イタリアにおける科学としての言語学の出発点は Ascoli にも認められるが、そのご2人の重要なロマンス語学者を経て、現在の国語学の出発点は Migliorini と Devoto の LN 誌創刊におくことができる。そして LN 誌以後の国語学史を三つの時期（促進；語原・語史；構造主義）に分けて考えることを提案した。

さいごに、以上に挙げた主要な学者の研究態度として共通にいえることは、いずれも比較、すなわちその源泉の指摘の対象となることであろう。それは、ヨーロッパの他国の学者からの影響である。Ascoli には印欧語比較文法学者の、Bartoli には Gilliéron の、そして Bertoni には Croce と Vossler の影響が考えられる。つづいて Migliorini には隣国の語史学者 Brunot や Menéndez Pidal の方法の間接的な影響が想定され、そして若い構造主義者たちの源泉は Saussure とすることができる。

Auerbach はその著 “Introduzione alla filologia romanza”（伊訳、1963）のなかで、ロマンス語学の三つの源泉として Saussure の一般言語学、Croce と Vossler の理想主義、Gilliéron の言語地理学を挙げている。⁷⁾ イタリアにおいては Gilliéron は Bartoli へ、Croce と Vossler は Bertoni へ、そして Saussure の直接の影響はもっとも遅れて1961年以後の若い学者たちにみられる。

このようにイタリアの言語学あるいは国語学には、国外からの影響が顕著であるが、その反面、イタリアの言語学はこれまでのところくに国外に影響を及ぼすこともなく、むしろ世界の言語学界の主流派をなすにいたったことはないといえることができる。

付記：本稿はロマンス語研究会1968年度秋季大会（10月13日）にて口頭発表したものである。

（早稲田大学助教授）

注 7) 同書, pp. 26~27.